
ほろにがバレンタイン。

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほろにがバレンタイン。

【Zコード】

Z5909L

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

2人が解毒剤を手にすることを諦め、『江戸川コナン』『灰原哀』として生きることを決めてから、早4年が経過した。小学校最後のバレンタイン。コナンに思いを寄せている歩美が決意したこととは... Candlelight閉鎖により移行作品。またあした...とはまた違う設定です。小学6年生の話で、一人が江戸川コナン、灰原哀として生きる決意をした後の話です。淡い淡い恋の話。

『バレンタイン』は、女の子がチョコで愛の興味をもつて大切思い出を作る日・・・
だからチョコは甘くて苦いんだって』

5年前。

学校が終わり、いつものみんなで商店街を歩いていたとき、バレンタインの話になつて。

そんな中、あの子が頬を真っ赤にして言つた言葉。

彼の僻みと、私の血みどりな話で、黒く濁つた空気を、一瞬のうひでピンク色に変えた言葉。

今になつて、また、あの子の声が頭に浮かぶ。

あのころは、まさか自分がこの日に誰かにチョコをあげたいだなんて、少しも思わなかつた。

なにこ、びびつてだろ？

今は - - - 。

「哀ちゃん、ツノが立つてこれくらい？これくらいだつたらち
やんと膨らむかなあ？」

「・・・うん、いいんじゃないかしら」

今日は2月12日。学校から帰り、ランドセルを置くとすぐに吉
田さんの家に行き、明後日に控える

バレンタインのためのチョコレート作りが始まる。

あの当時、あの日の私の心を無意識のうちに動かしてくれたその
言葉を母親に教えてもらい、また、父親には『誰かにチョコをあげ
るにはまだ早い』と言われたといつその彼女。去年、一昨年は、母
親と一緒にチョコレートを作つて、彼、だけでもなく、少年探偵団
の彼らだけでもなく、私や蘭さん、それにあの鈴木財閥の彼女や佐
藤刑事などの警視庁の人たちなど、沢山の人たちに配つていた。も
ちろん、私たち以外の人たちには一つずつだつたけれど、みんなと
つても喜んでいて。そしてそれを配つているときの吉田さんもまた
嬉しそうに笑つていた。

そんな彼女が、今年は特別なものを作りたいと言つたのが、今月
の初め。

登校時、彼らとは少し離れて一人歩いているときに、彼女に呼び

止められて、そう告白された。

あのときのそれとも違う、顔面林檎のように真っ赤に赤らめて。

『哀ちゃん、チョコレートケーキの作り方って知ってる? ナンくんに、食べもらいたいんだ』

それは、彼だけにしかあげないといつ、『特別な』もの。他の人はどうするの? と聞いたら、探偵団にだけはチョコレートはちゃんと作ってあげるよ、と笑った。

もちろん、哀ちゃんにもね、と付け足して。

『去年までの2年間はお母さんと一緒にバレンタインチョコを作った。だけど、今回は哀ちゃんと2人で作りたいんだ』

そうも言つた。

小学6年生になつた彼女は幼女ではなく、少女からやがて『女性』になる準備をしていくときで、可愛らしくもあり、美しくも感じることもある。まだ12歳だというのに。そのころの自分はこんなにイキイキとしていたから、なんて考えて、すぐに打ち消した。

イキイキとしているわけがなかつた。

……自分はその当時、まだ組織の施設にいた真つ只中だつたから。

組織が崩壊して早3年。本当に平和ボケしているのね、と少し情けなくなる。あんなに辛かつた、苦しくて死にたくて逃げ出したくてたまらなかつたあのときをすっかり忘れかけているだなんて。

彼なら。もし、この場に彼がいたら。

・・・彼なら、きっと『よかつたじゃねーか』なんて笑うに決ま

つてゐるけど。

「・・・哀ちゃん?」

ハツと我に返る。チョコレートクリームのいっぱい入ったケーキの種はガラスの型スレスレまで広がり、それをミィンの手でしつかり掴んだ吉田さんは、きょとん、とした表情で私を見ていた。

「どうしたの?なんだかボーッとして」

「あ、そう、そうかしら?」

「そうだよー。・・・でも、なんだか嬉しそうだね。なにかいいことでも考えてた?」

「・・・え?」

何を見当違いないことを言つてゐるのかしら、なんて内心苦笑した。嬉しいことなんて考えているはずがない。だつて、今さつきまで組織のいた時代を思い出していたのだ、そしてそれを忘れていた自分を情けないとも。

「だつて・・・」

吉田さんの指先が私の口端と、田元とを順々に、ツンと押した。軽く、あるいは爪が刺さる。

「口角が緩んでた。それから、田元も下がつてる。何かいいこと考へてた証拠だよ。なあに、誰のこと考へてたの?」

「・・・えつ、誰のこと、つて・・・?」

一瞬、ギクリとして私は言葉を失くした。きっと、今、すごい顔をしている。すごい顔で、吉田さんを見つめている。

だけど、ポーカーフェイスなんて作れる余裕も、今の自分にはないこと、頭のどこかで解っていた。

「光彦くん？それとも、川崎くん？浩介くん？哀ちゃん、結構クラスの男子に人気だもんねえ・・・！最近、なんだか話してるので、見てて楽しそうだし。いい感じだと思つてたんだあ」

クスクス笑う吉田さんに、私も無理矢理笑みを作つた。笑うしかなかつた。

好きとかそういうのじゃない。

けれど、いいことあつたの？誰のこと考えてたの？といわれたとき、最後に考えていた彼の顔がポツと浮かんで。もちろん、それはすぐに否定したけれど、・・・でも。

田の前の彼女を見ていると、罪悪感しか生まれてこなかつた。

「ねえ、本当に哀ちゃん好きな人いないの？」

はつとして顔を上げれば、熱くなつたレンジに容器を丁寧に入れた後で、ちょっと不思議そうな表情で私の顔を見ている吉田さんがいた。・・・思わず、田を逸らして、私は答える。

「いない、わ」

「本当に本当に？」

「ええ」

田を伏せて、躊躇いがちに答える私に、一瞬だけ探るように大袈裟に、じいっと見つめ、それからにっこり微笑んだ。

「・・・そつか。じゃあ、もしできたら、私にも教えてね。・・・

私にできることがあつたら、何でも相談にも乗るし、協力するから！」

「え？」

「だつて、哀ちゃんは、私にいっぱい相談に乗ってくれたじゃない！今度は私の番だよ！」

明るい表情で笑う彼女を見て、ズキズキと心が痛む。何だか解らないこの痛み。一体何のものか解らないけど。

純粋な彼女をまともに正面から見ることがしばらくは出来なかつた。

それから數十分後。2人の作ったケーキは完成して、少年探偵団に上げる手作りチョコも完成して。

「ハイ、どーぞ」

と帰る時に手渡されたのは、いつの間に作ったんだろう。小さなカツブケーキ。可愛くラッピングされて、袋に3個、入つていて。

「これを食べるのは、私と哀ちゃんと、おつきなホールで作ったコナンくんだけだよ？」

と吉田さんは笑つた。

明後日はバレンタイン♪トー。

彼女の恋が叶いまよウツビ——。
もう心から願おうとするの、どこか震えているのは、何故だろ
う。

通いなれた路地をとぼとぼと歩く。もう外は橙色に染まり、日が沈もうかとしている時。

博士の待つ家の前まで来てみたのに、何故かまだ帰りたくないで、私はとぼとぼと再び元きた場所を引き返した。それから商店街の中に入り、小さな本屋で雑誌を立ち読み。

どこもかしこもバレンタイン特集で。ケーキやクッキーの作り方。美味しいチョコレート専門店、それにバレンタインの夜に出かけるデートスポット。はあ、と溜息をつき、私はそれを閉じ、店を出ようとした、その瞬間。

「・・・っ！」

ドキン、心が跳ね上がった。

「・・・あれ、灰原」

ちょうど出ようとした矢先。江戸川くんが逆にちょうど今、入店してきた時で。驚いたように自分を見つめていた。学校帰りだったようだ、ランドセルを背負い、汚れたサッカーボールを手に持つて。

「何してんだ、こんなところで」

「え、あ。・・・ちょ、ちょっと暇だつたから、・・・立ち寄つただけよ。・・・あなた、は？」

動搖を隠し、言葉を選びながらゆつくつと「」へ自然を装つて顔を背ける。今は顔を合わせたくない。

「いや、ミステリー小説の、新名先生の新刊、一冊買って置いた」と
できねえかなあって思つて来てみたんだけど……。まさかこんな
ところで灰原に会うとは思わなかつたな」

「そうね、奇遇ね」

「ああ。てかオメー……なんだか……」

まるで犬のように、くんくんと小鼻を蠢かせて1歩、2歩と私の方へ近づき、匂いを嗅ぐ。それから、私の手を掴み、自分の口元まで持ってきてせらに。

慌てて私はその手を無理やり振り払つた。

「ちよつ、何……」

「いや、別にとつてくわねーけどさ。……なんだか甘い匂いが
すんなあつて。……チョコ?」

「えつ……!？」

思わず動搖してしまつ。私があげるわけではないのに、どうしてここまで過剰に反応してしまつたのか、今となつてはわからないが。そのとき、ちよつと彼の視線は、田の前を通つた女子中学生の持つている雑誌に田が行く。

『バレンタインデーに作りたいスイーツ30種』

『バレンタインデー近し！ おいしいチョコスイーツの作り方』

「まさかオメー、誰かにチョコ、あげんの？」

「え、……あげるわけ……ないじゃない」

さりに動搖し、それでもその気持ちを懸命に隠して。

どうして？ そう聞き返そうとしたとき、彼はフツと鼻で笑つた。

て興味ない村
あがいがこと語りてかれ

貴方の言う通りだと言つただけよ。のんきに”チョコ、チョコ”恋愛、こつこをしているのはこの日本だけ……つてね。そして、その前に、『くだらない』とはつきり言つたのは、江戸川くん。あなたよ？」

「え？ んなの言つてねえつて！」

・・・・・本当、自分の言つたことに対してもテキ

「おめでた

「つーか、細かいこと、テメーが覚えすぎなんだつーの！ 大体そんな5年前の話」

—あら、それを云ふかけてきたのは貴方の方じゃなかつたかしら？

卷之三

顔を真っ赤にさせて、それからふーっと胸の底からの大きな溜息を一つ。不機嫌になつてゐる彼の

机顔を見て、和は思わず心と叫びした。そこで、和が自分を見て、彼は穏やかに微笑んだ。

1

「フサエさんがいるからいいでしょ。・・・彼にあんまり甘いの止もうぜ」本郷ははとせんが、

「一歩」一回の「一歩」はうりうりものをおさかれて体懸くせられたくなこの

「それがダメなのよ。あの人、一度に

れて食べたことのあるのよ。フサエさんにもらつて、私ももらつたら、彼、一体どんなことをしでかすか……」

「ハハ・・・ 信用されてないわけだ」

苦笑いをする彼。確かに彼ならやりそつだ、と想像したに違いない。

「じゃあ、博士にもやらねーってことは、今年も誰にもやらねえ
ってことだ」「そうよ」「みう」「ずっと?」「ずっと?」
「ずつと、って?・・・」の先つてこと?「そう」「そう」

彼の目が自分を捕らえる。まっすぐな蒼い瞳。吸い込まれそうな
黒の中に透明がかつた、青。

「・・・・・・・ さあ、それはわからないわ。心変わりするかも
しれないし」「だよな」「そうよ」「そう」

彼に背を向け、私はバッグを背負いながし、じゃあ、と両手を上
げよしきとした。

「だつたらその時、俺にそのチョコ、くれよな?」

ドキン。

大きく、心臓が一つ、高鳴った。けれど、振り返りもしなかった。
振り返る勇気というものが
なかつたのかもしねない。

「え、何・・・」

「バーコ、何動搖してんだよ。義理とか友チヨコとか世話チヨコとかいろいろあんただろ？オメーの作ったの、どんなか一度食つてみてえんだよな。あ、変な薬とか入れんなよ。したらマジ怒るからな」

キシキシと笑う江戸川くんの声に、私は何故か高鳴る気持ちを抑え、声を振り絞つていた。

「・・・あげないわ、誰にも」

「え？」

「私がそんな柄じゃない」と、あなただけって知ってるでしょ。もしあげたとしたら、それは本当にたつた一人だけ

「そつか、残念。じゃあさ、そんときは毒見でもいいからオレに

「・・・・・・・ねえ」

そこでようやく振り返り、思わず彼の言葉を遮った。そして彼の瞳をこちらから見つめる。彼の言葉を、今はもうあまり聞いていたくもなくて。・・・いや、彼が並べる言葉のおかげで気になつて仕方なくなつてしまつたことを、今すぐ彼の口から、江戸川コナンの口から聞いてみたかったのかもしれない。

「・・・何？」

きょとん、とした表情で彼は訊ねる。

「なんで私のを欲しがるの？バレンタインになつたらあなた毎年沢山のチヨコ貰つてるじゃない？あなたのお母さんからも、蘭さんからも、吉田さんからも、クラスの女子からも。それから、それ以外のあなたをファンとする全ての子からも。・・・そうしていつも

チョココレートをもてあましてる。甘いものなんて、そもそもあなたそこまで好きではないはずででしょう？だから沢山のバレンタインのプレゼントの山に、もつチョコなんて見たくねえ、なんていつも零してるじゃない。・・・なのに、なんで・・・？」

「・・・え？ そつだよな、あー・・・。何でかな？」

そこまで私に言われて、初めて気づいたよう。彼は不思議そうな表情をして、それから、暫し考えて。そのあと、まだ念頭している複雑な表情で顔を上げた。

「んー・・・。よくわかんねーけど。特別、なのかなあ」

「え？」

「オメーんだつたら、食つてみてえ、つて思つんだよ」

ドキン。

今日の彼は、どうしてこんなに動搖するほどばかり言つのだ。

「オメーらは俺の大切な仲間だからな。俺にしてみればどれだけ心が込められてても、顔も知らない

誰かが選んだり作ったりするものより、たとえそれが、その人たちよりも心が込められていなくても——。ただ、いつも一緒にいて、笑つたりケンカしてたり、冗談を言いあつたり。そういう気の知れた人たちから貰つたものの方が嬉しいだろ？」

「・・・そうね」

彼が発していく言葉のおかげで、ぽつぽつ温かくなつた頬は冷え、自分の高まつていた気持ちは、まるで温度計の水銀が、お湯から冷たい水に移されたときのように、すうーっと急激に下がつていく。

彼の言つことは尤もなことだ。一体何を期待していたのだろう、自分は。バカバカしいのにもほどがある。

だから、また自分にもムカムカして。気がつけば彼にその言葉をぶつけていた。

「でもね、『あいにくさま。あなたにどれだけ言われても、私は今までの彼女たちとは違つて、あなたのためには作らないわよ』

冷たく、吐き捨てるようにその言葉を彼に浴びせる。こんな可愛いセリフ、『最後通告』みたいなことで、わざわざ彼に言わなくてもいいのに。

案の定、彼はいつものように呆れたような、困ったような表情をして、苦笑した。

「言われなくてもわかってるよ。言つてみたまでだつつうの。まったく相変わらず『冗談のきかねえヤツだなあ、オメーは』

ほら、言われた。

自業自得なのに、胸がみるみるしぐこチクチクと痛くなつて。思わずさつと俯いた。

そんな自分の気持ちの変化に勿論気づくはずもなく。

ちよつとした間の後で、思い出したように彼は「あ」と呟いた。

「そうそう、今年の歩美のチョコレート、どんなのかな?去年は熊の形だつたろ?あれ、結構うめーんだよな。さすがお菓子教室に通つているおばさんと作つただけあるよ

「・・・そうね」

そこで再び顔を上げ、彼を見つめ、作り笑いをした。

今年はチョコレートケーキよ。あの子が一生懸命貴方のためだけ

に作ったケーキ。

ねえ、工藤くん。貴方はどんな顔をしてそれを食べるのかしら・・・?
・?

「「めんなさい、私、もう行かなくちゃ。・・・今週は私が夕食当番なの。急いで家帰つて作らなくちゃ」

「あー、そつか。うん、じゃあまた明日」

「・・・そうね、明日。・・・小説、買うことができればいいわ

ね

「うん・・・サンキューな?」

彼と別れ、私は再び博士の待つ家に向かう。
さつきまで綺麗な橙色の空が、もうつっすら紺色になつていて、
月の色が少しずつ田立ち始めていた。

歩きながら浮かぶのは、今会つた、彼の顔と、その前までチョコ
レートケーキと一緒に作った彼女の顔。

ドクンドクン、と高鳴る心。ズキンズキンと痛む心。その2つの
動悸がとっても苦しくて、辛い。

その原因が何度も何度も頭を掠め、けれども、どうしても否定し
なくちやいけない気持ちでいつぱいで。

家路に向かう足取りは重く。

ああ。明日からどんな顔をして、2人に会えぱいいのかしら?
私はそのことばかりをずっと頭の中で、考えていた。

「… 哀ちゃん、チョコレートケーキの作り方って知ってる? ハンくんに、食べてもらいたいんだ。」

「… チョコレートケーキ? … す、じゅうじゅうない。どうして?」

「… 私ね、コナンくんに告白しようかと思って。」

「… うへ、はへ?」

「… うん、もう卒業でしょ。… 中学校に行つたら、もし同じクラスにならなかつたら、もつ話せる機会が少なくなつちゃうかもしね。」

「… そんな大袈裟な。」

「… 大袈裟じゃないよ。だってクラスが倍になるんだよ? 部活だって、授業だって時間が違うんだよ。少年探偵団とかと一緒にいるのより、コナンくんが毛利のおじさんとの推理の方が楽しくて、忙しくなつちゃつたら? 私は止められないよ。… だから、一緒にいつでもいられるのは… は。… 彼女じゃないとダメなの。友達じゃ、ダメなんだよ。」

『友達じゃ、ダメなんだよ』

その言葉が大きく響いて、私はすつと目が覚めた。目覚まし時計よりも早い時間。時計を見ると、午前6時18分。12分早く目覚めた私は、大きく溜息をつくと、すぐに頭を抱えたい気持ちに陥った。

参った。

まさか夢の中で再現されるとは思わなかつた。それほど気になつていたことだつたのか、寝ているときでも頭は自分を休めさせることをしてくればしない。

この一件で、私は再度自分の気持ちに気づかれることになつてしまつた。 - - - というか、気づかないフリをしていても、そういうわけにはいかないといふまで来てしまつた。

こんな気持ち、5年前に置いてきたはずだったのに、まさかまだ残つていただなんて。信じたくない事実。

- - - 私は、『江戸川コナン』が好きなのだ。

私は2度、彼に恋愛感情を持ったというわけだ。

1度目は、江戸川コナンという着ぐるみを着た『工藤新一』に。そうして、2度目は『江戸川コナン』本人に。

1度目は『工藤くん』の幼馴染とのことを考え、今度は『江戸川くん』の幼馴染で、そして何よりも自分が大切に思う彼女とのことを考えて。つぐづぐ彼とは縁がない。

結局『工藤くん』と、幼馴染の彼女とは自分のせいでうまくいくことはなかつたから。今度は全力で応援しようつと心で誓つた。

そう、全力で応援しなくちゃ。

サイドボードに置いてあつた携帯電話を手に伸ばし、溜息をつく。日付は2月14日。バレンタインデー本番。

彼女にメールをしようかしら、なんて考えていた矢先、思つていた人物からメールが届いて。

私は小さく溜息をついた。

チョコをあげる子もいれば貰う子もいて。

誰にも渡さず、興味ないという女の子もいれば、誰からも貰えず不安に明け暮れている男子もいて。見ていて結構面白い。まあ、自分は誰にも渡さないという部類に入るのだけど。

吉田さんは朝からちょっと緊張気味で、じつじつ笑っているけれど、その笑みはやっぱり引きつっている。

「はい、これ、光彦くんと、元太くんと光彦くんと、それに口ナ
ンくん」

いつものように可愛くラッピングされたチョコレートを3人に丁寧に渡す。

クラスの違う田舎くんと小嶋くんは隣の教室から出張してきたのだけれども、その大きな掌にふんわりと乗せられた可愛らしい包みにキラキラ目を輝かせて。

「今田はお母さんとじやなくて、なんと娘わやんと2人で作りましたーーー。」

畠田さんの言葉に、田舎くんと小嶋くんは、その暑苦しこほどの視線を、私に向けてくる。なんだかちょっとと氣恥ずかしい。別に私はさほど手伝つてない。今お皿ねつとしたとき、江戸川くんの視線がじつわに向かられてこる」といふづき、ドキンと小さく胸が高鳴つた。

「な、何？」

「いや、だから一昨日オマーの体からチヨコの匂こしたのかつて思つてよ・・・」「

会話がいつたというような表情で、それから、何で黙つてたんだよ、といつよつた表情で軽く睨まれた。

「別に。提案したのは彼女だし、私はそれに手を貸しただけだから

「ひ

「ふうん・・・

それでもやっぱり不満そうな顔で、けれどもとりあえずは満足だつたようで、サンキューな。と持つていたラッピングされた袋を吉田さんに、そうして次に私に感謝の目を向ける。

一瞬、ちょっと嬉しいような恥ずかしいよつた、そんな感情が芽生えた。自分だけが作ったわけでも

ないのに。なのに、心のどこかがほんわか温かい。けれど、横で頬を染めている吉田さんを見て、

急激に気持ちは下がつてしまつ。本当に自分は何を考えているのだ、と。

視線を移せば、彼の机の上には既に10個近くのチョコレート。きっと帰りまでにはさらに倍以上のものがもらえるのだろう。

吉田さんは、一体いつあげるのかしら?

そんなことを考えていたら、いつの間にか授業が終わつてしまつて。気がつけばもうS H Rの時間だった。

この数時間、ひとつも授業のことなんて耳に入らなかつた。・・・

なんて、いつも授業を聞いている

わけではないけれど。だから授業に上の空でも、誰も気づくはずもなく。担任すらいつものことかと諦めているようだ。それは自分にとつて非常に好都合なことなんだけど。・・・私はちらり、と斜め前で憂鬱そうに座つて黒板を眺めている江戸川くんに視線を移した。

授業が終わり、彼がすつとランドセルを背負って立ち上がる。そうして、それから何秒か後に吉田さんも。田立たないよに、同じようこランドセルと手提げ袋を持つて。そして私の席の脇で立ち止まり、そつと囁く。

「行つてくるね」

・・・・・ええ。
いつてらっしゃい！
頑張つてきてね」

二
ん
・
・
・
・
・
・
ありかと

緊張した面持ちで、しかし何とか笑顔を作つて微笑み。そうして

教室を出でていつた。袋からは甘い匂い。

甘くてほん苦いチミーレークかどこでもしいをして私の鼻腔を掠めていった。

「今までそうしていただか。巴谷くんも小嶋くんも一緒に帰ろうと誘つてくれたけれど、やつぱり待つてあげたくて。小嶋くんは解らなかつたようだけれど、2人はちょっと用がある、そう告げた時点で、聰明な巴谷くんはすぐに察してくれて、深く追究はせずにさっさと切り上げてくれた。

落ち着かない。

・・・落ち着かない。

教室の中を行ったりきたり。席に座ったり、立ったりを繰り返し。最終的にはどうしようもなくて、ロッカーに寄りかかり、そのまま床の上で体操座りをして。

膝小僧に頭をつけて、考える。

私はどうしたいのだろう。吉田さんの恋を結ばせてあげたい。大切な子。悩んだりしているときに、何も自分のことは知っているはずはないのに、そのときの場面で必ず適切な言葉をかけてくれる子。周りを明るくさせてくれる子。・・・大事で大事で、仕方なくて。

そんな彼女がこの5年間、ずっと想いを寄せていた彼。本来なら手放しで応援してあげたいのに。

どうして、こんなに胸が痛いんだろう。

つましくいふことが、心のどこかで怖いんだろう。

・・・なんで、今更。好きになってしまったことに、気づいてしまったんだろう。

「どうして」

泣きたくないのに。・・・泣いたら吉田さんに申し訳なくて。思わず歯を食いしばってたのに。

耐え切れなくなつて、一滴、一滴。ぽろりぽろりと膝を濡らした。

「あい・・・ちゃん？」

どきん、大きく再び心臓が跳ね上がり、私は咄嗟に顔を上げて、振り返る。

教室のドアのところはちょっと驚いた表情で立っていた。

「泣いてた、の？・・・目が濡れてる」

「え」

その言葉でようやく今の状況に気づき、はっとする。が、すぐにポーカーフェイスを作った。

「欠伸。・・・見られちゃったわね」

「ああ、そうだよね。・・・よかつた」

心からまつとしたように吉田さんは笑い、私の隣に体操座りをした。反応ははどうだったのか。この顔はうまくいったのか、それとも振られたのか。気になつて、でも訊けなくて。

「ケー・キ、渡せたよ？」

「・・・そう。・・・どうだった？」

「喜んで、くれたよ」

一瞬、ズキン、胸が痛む。こんな痛みなんてほしくないのに。

「そう・・・。よかつたじやない」

ぎこちない笑顔になつていなかつた。うまく言つたつてことなんだ、きっと。

祝福して、あげなくちゃ。

「告白、できなかつた」

「え？」

「なーんかさ。ケーキ渡した後で一生懸命気持ちを伝えようとして。胸がいっぱいになっちゃつて。泣きそうになつて……でも、頑張つて言おうと思つたんだけど・・・か」

「・・・・」ナンくんが、『大切な友達』なんてサラリといつから。卒業しても、俺ははぜつたいたい変わらないみたいな。そんなことサラリといつから。もう言おう言おうとして気持ちがなんだかもうそこでどうしようもなくなつちゃつて。こんな雰囲気のときに、友達じやダメだよ、ナンくんの一番じやなきやダメなの！なんて言つたら嫌われるだけかなあ、なんて短期間の中で思つちゃつてさ。そうしたら、言えなくなつちゃつて。そのケーキ、ナンくんにはいつもお世話になつてるから、特別だよ、みんなで食べてね、つて・・・なんとか笑つて、帰つてきちゃつた・・・なんか。なんか、なんか、疲れちゃつたなあ」

大きく、ううん、と伸びをする。泣いてはいない。だけど、なんだか本当に疲れたという表情で。

あの短い時間の間に何年もの時が流れてたとこみづな、そんな表情をしているから。

そんな彼女を私は横田で見ることしかできなかつた。そうして頭の中に、あの言葉が浮かぶ。

『オメーらは俺の大切な仲間だからさ』

—昨日の、彼の言葉。そんな常套句。決まりきった言葉を誰にも
彼にもぶつけているのだろうか、あの男は。
どれだけプレイボーイなんだ、どれだけ人を傷つかせれば気が済
むのだ。

思わずかつとなつて、私は教室を飛び出していた。

どこにいるのか、わかるはずがないのに、私はただ闇雲に彼を探していた。

探して、彼をひっぱたいてやりたい気持ちでいた。そうやってうまいことを言って、いろんな人たちを苦しめて。

- 『大切な仲間』？
- 『大切な友達』？
- 『大切なクラスメート』？
- 『大切なファン』？

そうやって、彼は工藤新一のところから沢山の女の子を泣かせていたに違いない。

本当は他の女の子なんてどうでもいい。彼がプレイボーイだってどうでもいい。

けど、この言葉で、吉田さんを傷つけてほしくなかった。そうして、その誰にも浴びせるかの言葉を、自分にも向けてもらいたくなかった。

吉田さんに向けた言葉か、自分に向けた言葉か。

どっちの言葉の方がより強く今の自分を突き動かしているのだろう。後になつて考えても、きっと暫くは答えが出せないものなのかもしれない。

けれど、そのときは何も考えられず。

ただ、闇雲に彼を探して走り続けていた。

図書室、生徒会室、下駄箱、理科室、それから・・・。

----- 体育館。

ハアハア、と喘ぎながら体育館の前の扉を開けようとすると、ちよつと女のがプレゼントを抱えて出て行くところで。・・・彼女は泣いていて。確か、この子は、C組の杉浦さんだ。真っ黒なショートカットがとても似合つ、可愛らしい女の子。江戸川くんのことを前から気に入っていたというけれど。

・・・まさか。

すれ違つた瞬間、ある予感が閃いて。私は急いで体育館に足を踏み入れた。

いた。

体育館の真ん中で、頬を真っ赤に紅くして。・・・くつきり残つているのは、紅色の『手形』
そうしてすぐに察してしまう。ああ、『また』この人は振つたんだ、と。今度は何て言つたんだろう。
『大切な隣のクラスの女の子』、かしら?

「・・・よお。どーした?」

紅くなつた片頬を隠すように手で押さえ、彼は少し決まり悪そうな表情でこちらを見た。

「・・・今の子、振つたの?」

「え?ああ」

「なんで?プレゼント持つて出てつたわよ、あの子。・・・他の子からは受け取るけど、あの子からは受け取らないのね。あの子は

他の子と何が違うのかしら?」

やつぱりキツい物言ことになってしまった。今度はどつこつ風に相手を振ったのだ、と。

「え、いや、呼び出されて「一もつプレゼントを渡されるのは、そんな、ねーけど。あとは大勢で来られたり、クラスの子たちから義理だなんとか言つてくれたり。今子には放課後体育館に呼ばれて。来て見たら案の定つきあって、つて言つて。だから、その気はないし、そういう気持ちだったら受け取れないつづつたら、ひつぱたかれた。・・・たく、女はこえーよな・・・・・やうこうヤツばかりでもねーのはわかってるんだけどな・・・」

おー痛で、と叩かれた頬を摩りながら、彼は媚びたように笑う。やうか、だからか。・・・よつやく吉田が言つた。そうしてみるとみゆみに哀しくなつて。

「めんどくさい?」

「・・・は?」

「そーやつて、吉田されるのがめんどくさい?だから逃げたの?」

吉田される前に、あの子たちから

「は?あの子』たち』って誰だよ?」

「吉田さんよ。・・・やうして同じ常套句を使つて振った女の子たち」

「は?振った!?ちよ、待てよーーー一体どれがどーなつてそんな話になつてんだよーーー」

焦つたように彼が声を張り上げる。

「だつて、言つたじやない。彼女に、『大切な友達』つて……。
……知つてたんでしょう？あの子が自分のことをどう思つていたか。
……何を、したかつたか」

知らないなんて、言わせないわよ。

彼は知つてたじやないか。小学1年生のときから、彼女の気持ちを。そうして、いつも。

『逃げてきた』じゃないか。受け止められずに、逃げてきた。

私の言葉に、一瞬彼がハツとして、それから嘆息ついて、作り笑いをした。

「なんだ、歩美に聞いたのか？」

「ええ。『大切な友達』つて言つたんでしょう。告白するつてわかつてたから、逃げたんでしょう？」

「ああ。そうだな、わかつてた。……今の俺には、俺はあいつのことを『彼女』にするつて気持ちは全然ねーから。……先のことはわからんねーけど。……でも、失いたくなかった。……言つただろ？一昨日も。あいつらは俺のかけがえのない『大切な仲間』『大切な友達』なんだからつて」

ドキリ。

一昨日の彼の言葉が頭を過ぎる。

「あいつの気持ちを聞いた後で、俺のそんな気持ちを伝えたところで逆にあいつを苦しめるだけだ。

告白されて友達でいましょう、なんてそれでハイそうですか、なんてうまく行くわけねえ。それがわかつてるから。

……言えなかつたんだよ。そのあとぎこちなくなるのがイヤだ

つたから

どうしてだろ？

あんなに彼を責めていた気持ちがいつのまにか薄くなつて。納得しないわけにはいかなくなつていた。

「じゃあ、本音だつたの？」

「え？」

「一昨日の、『大切な仲間』とか、今日の『大切な友達』とか

「当たり前じゃん。何？ウソに聽こえたの？」

「ウソっていうか……。予防線にみんなに使つてたわけじゃなかつたの？」

「……は？ イマイチ意味わかんねーんだけど。……使つてるわけねーじゃねーか。何でいちいちそんな思つてもねえことみんなに言わなきゃいけねえんだよ、めんどくせえ」

心底嫌そうに顔を顰めて、彼が答える。

「まさ。 . . . 歩美んときは予防線つちや予防線の部類に入つてたかもしんねーけどさ。でも間違いなく本音だつたし。 . . . つか大体オマー、俺と一昨日、そんな雰囲気になつたこと一度でもあつたつけ？」

「へへへっ……！」

思わずムカツとして私はいつのまにか手に持つていたタオルを彼の顔面に掛けて投げる。

「うわー何だよ！」

突然の反撃に多少ビックリして、彼はそのタオルを受け取るうと

手を伸ばす。そして彼が受け取るのを見え、そのまま背中を向けて、私は吉田さんとまだ待つていてるかもしだい教室へと歩き出した。

「・・・なあ、灰原」

「・・・なに」

ポツリ、彼が言つから。

私は足を止めた。振り返ることはしなかつたけど。彼が何を言い出すのか、大体のことはわかつていていたから。

「・・・あいつ、泣いてたか？」

「泣いてないわよ。・・・相當、疲れてたけど・・・でも、あの子ならきっとあなたの気持ち、すぐにわかつてくれるんじやない？」

「・・・そつか。・・・だつたらいいな」

「そうなるわよ、きっと」

「そか、そーだよな」

しんみり独り言を言つ彼を残して、私は再び歩き出した。

教室にまだ吉田さんはいるだろつか。・・・いないかもしだい。でも、きっとわかってくれる。

明日には笑つてみんなに『おはよっ』と振りまいてくれる。・・・そんな気がしてならなかつた。

教室に戻ると、吉田さんがにっこり笑つて待つていたから、驚いた。

席に戻つて、一人ぼんやり座つていて。私が来たとたん、にっこり嬉しそうに微笑んで。

もうあれから20分以上経つていたところの。「わいして、今は一人でいたいだろ？、そう思つていたのに。

「おかえり」

「・・・ただいま。」めんたい、急に飛び出しちゃつたから。・

・心配した？」

「うん、・・・ありがとう、ね」

「え？」

その『ありがとう』の意味を理解できずに一瞬戸惑つてしまい、それから確かめるように彼女を一度見した。心配させないようだとわざと笑顔を作つているのか、それとも、何かこの数十分の間に彼女の心境の変化があつたのか。捉えることが難しい。私は彼女が次に言つ言葉を待つていた。

「体育館、私も行つたんだ。泣きながら、コナンくんの悪口を言う女の子の声が聞こえて。思わず聞き耳たてたら、C組の杉浦さんで。体育館でフラれて。・・・B組の灰原さんに泣いてるところ見られたとかそんなことを聞いたから、急いで行つたら、ちょうど娘ちゃんがコナンくんのことすごい勢いで怒つてて」

「・・・つ！」

「コナンくんの気持ちも聞いちゃつた。・・・あーあ、やつぱり気づかれてたか。・・・ちょっと、うつん。・・・かなり恥ずかしいよ」

ペロリと可憐らしく舌を出してみせた、吉田さんは笑つてみせた。強がつていいだらうか。吉田さんの様子をビデオしても窺つてしまつ。

嫌いとも言つてこない。

興味もないとも言つてこない。

かけがえのない大切な『友達』『仲間』とも言つてくれていた。

だけど、彼はいつも言つていた。

『今の俺には、あいつを『彼女』にする気持ちは全然ない』
それを聞いてしまつたとしたら、一体どう思つだらう?

「ねえ、哀ちゃん。あたしも、絶対綺麗になつてやるんだー。」
「え?」

一瞬のうちに我に返ると、吉田さんは元気にして、満面の笑みで笑つていた。

「『ナンくん、先のことはわかんないって言つてたでしょ。だから。・・・未来に、彼が好きになつてくれるよ。』といつた。彼女として考へてくれるよ。・・・中学校に行つても、絶対他の女の子に田移りしないよ。・・・私頑張る!ね、目指せ、いい女!」

だもんね！……だから哀ちゃんも、一緒に協力してねー！」

「え？」

「ね、哀ちゃん」

可愛らじくウインクする吉田さん、そのパワーに、私は「え、ええ」と何とか言つしかなくて。

それに満足したよつて吉田さんは再びヒーリングを頷いた。
そうしてすつと元気よく立ち上がり、バッグを持つて一歩二歩と、歩き出す。

「わー帰るーなんだかお腹すいちゃったーー！」

気がつけば時刻はもうすぐ17時。ほんの数十分前まで緊張でいっぱいだった彼女の顔は呆れるくらいにもうすつきりしている。あつけらかんに吉田さんが言つから、私は心の底から安心した。もう、大丈夫だ。だから私は『いつもの』私に戻ることに心がけよ。まだまだ切り替えが難しいかもしれないけれど。

「ハスド寄つてこりよー」

「・・・寄り道禁止よ・・・」

「えー、いいじゃない。ちょっと語りつよードーナツとか買って、ね、いいでしょ、哀ちゃん！」

「・・・わつそく太るわよ・・・」

「わつ・・・・・・・哀ちゃんのイジワル。傷心の乙女を傷つけて何が楽しいの・・・?」

涙田になつた吉田さんを残して、私は素知らぬ顔を決め込んで、教室を出る。

もちろん、その涙田は『一セモノ』だとはわかっているから。

「もーーー哀ちゃんー！」

知らぬふつ。

「哀ちゃん こんばー！」

沈黙。

「・・・・・哀ちゃんー！」

・・・・。

「哀ちゃん、 大好きーーー！」

ぎょっとして振り返ると、吉田さんはいつのまにか走って近寄ってきて、ぎゅっと後ろから抱きつかれ、極めつけは耳元で。彼女はそつと囁いた。

「・・・ H A P P Y V a l e n t i n e - s D a y ・・
これからも、よろしくねー！」

4 (後書き)

今回は哀ちゃんと歩美ちゃんの話になりました。

いつも、中学生「哀で、付き合つてたり、そうじやなくてもお互
い好きあつてたり、とか。そんな感じだつたので、今回はそういう
話のもつと前。お互い、まだ自分の気持ちに気づいていなかつたり、
気づき始めたり、とかそういう次元の話を書きたくて書いてました。

哀ちゃんやコナンくんの傍にいつもいる歩美ちゃん。小学校のこ
ろから彼に想いを寄せていた女の子。私の描く中学生「哀では、い
つも歩美ちゃんは2人の恋を応援しています。コナンくんが誰に気
持ちが行つて いるか、ちゃんとわかつています。小学生のとき、
コナンくんが蘭おねーさんを好きだつたのをちゃんと知つていたの
と同じように、彼が今の時点で誰を好きなのかも。そんないつも健
気な彼女を今回はちゃんと告白させてあげたくて・・・。

でも、結果は成就させるわけには私的にはいかなかつたので。(注
:「哀推奨・笑) そして、「哀な話もちょこつと取り入れた
かつたので(注:「哀推奨・笑) こんな形になつちゃいました。い
かがだつたでしょつか。

ここまで読んでいただきて、ありがとうございました!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5909/>

ほろにがバレンタイン。

2010年10月13日16時29分発行